イエス・キリスト覚え書

国松夏紀

このところ断続的にではあるが、芥川龍之介とドストエフスキイとの相互関係を考えている。芥川晩年の『闇中問答』、『歯車』にドストエフスキイとともに付合って来て、この一年ほどは、続編をも含めて『西方の人』を読んでいる。この作品に至っていよいよ、両作家におけるイエス・キリストの問題に取組まねばならなくなった。複雑多岐にわたる大きく難しい問題である。アプローチの方法を模索しているところであるが、たまたま昨年、トカレフ編『世界諸民族の神話』という二巻本辞典の第一巻が入荷した（刊行は、一九八〇年、モスクワ、ソヴェト百科辞典出版所）。イエス・キリストの項目には、図版を含めて十五頁（四九〇頁―五〇四頁）が割かれている。執筆者は、編者のトカレフ自身と、アベリンツェフの二人である。前者は、イエス、キリストそれぞれの名称の由来から説きおこし、福音書及び偽典・外典に拠って、イエス・キリストの「地上における生涯」を記述する。次いで、三位一体説を中心とする神学上の問題の考察の後に、イエス・キリストの学問的研究における二つの流れ――神話学的研究と歴史的研究――が概説される。後者は、文学と美術に現われたイエス・キリスト像を通史的に記述している。

イエス・キリストは一つの大きな謎である。神であるのか、人であるのか。その矛盾の神学的止揚としておそらくは三位一体説もあるのだろう。それはともかく、イエス・キリストという人間がかつてこの世に存在したことは歴史的事実である。福音書という彼の使徒たちによる彼の生涯の言行録も残されている。聖書一般の歴史的並びに考古学的研究によって、その神性が次第に剝奪され、奇蹟が否定されてもなお残るイエス・キリストの人格、そこに人々は何故引寄せられるのか。芥川龍之介やドストエフスキイも、福音書を拠り所として、イエス・キリストに魅かれた。その魅力の根源は何であろうか。手懸りを索めてアベリンツェフの記述を追ってみよう。彼は、文学と美術に現われたキリスト像を、古代・中世・近代及び現代と歴史的にたどっているのであるが、ここでは特に文学との関連が強くなるロマン派以降の記述に限って抄訳しつつ考えてみよう。

十九世紀初頭、ドイツ・ロマン主義「ナザレ派」の絵画は、劇的なバロック絵画や古典主義の冷たい絵画を捨てて、倫理的厳格さと詩的感動を重んじた。一方、ロマン主義的ペシミズムも表明される。リヒターの『ジーベ

ンケース』中の「神が存在しないことについての宇宙の高みからの死せるキリストの演説」がそれである。キリストの生涯はすでに、神が人間に至る道ではなく、人間が存在の無意味さを証明するべく不在の死せる神へと至る道なのである。この新しいモチーフが十九世紀の抒情詩で繰り返される。ヴィニー、ネルヴァル、ボードレール等がその例であり、二十世紀のリルケは彼等の後継者である。また一方、十九世紀の歴史主義の影響も見落とすことは出来ない。福音書の出来事が神秘主義から解放され、歴史的・文化的視野の中でその一つのモメントとして時間と場所の具体性を帯びて来たからである。また、一八五〇年代の考古学の成果も聖書一般にとって革命的なものであった。ルナンの『キリストの生涯』の全ヨーロッパ的成功もこうした文脈の中で把握されねばならない。彼は、キリストを歴史小説のテーマとしたのである。

――すでに論じられているように、ルナンの『イエス伝』の影響も受けて書かれた芥川の『西方の人』も同じような文脈で把握されねばならないだろう。その際、ボードレールを始めとする世紀末の雰囲気も見逃せない。芥川にとってキリストが、不在の死せる神に至る道であったかどうかは考慮の余地があるのだが。アベリンツェフの記述をさらに追ってみよう。

イエス・キリストは神たることを止めたけれど、その苦悩する人間性は鋭く知覚され、十九世紀の自由主義的民主主義的インテリゲンツィアの理想像の一つとなった。キリストは、虐げられた人々に対する犠牲的愛の具現であったのである。ハイネやユーゴーの作品がその例である。ロシアでは、プレシチェーエフやナドソンの詩、ドイツ絵画では、一八八〇年代のフォン・ウーデの作品がある。その画面ではキリストが、当時の労働者たちの諸タイプの中に置かれているのである。ロシアのクラムスコイの絵画「荒野のキリスト」、アントコリスキイの彫刻、また、一八九〇年代のゲーの絵画もある。ネクラーソフのチェルヌイシェフスキイに関する次の言葉が、この時代全体を特徴づけている。「怒りと悲しみの神が、地上の支配者たちにキリストを思い出させるために遣わした。」ここで彼とは直接的にはチェルヌイシェフスキイを指すと同時に、十九世紀ロシア作家一般のことでもある。彼等は、キリスト像の正教的神秘的解釈を保持しており、一様に「ゴルゴダの丘」にアクセントを置いていた。詩人のチュッチェフも、十字架の重みに苦しみ息も絶え絶えとなっているキリストを、赤裸の謙譲なるキリスト教国ロシアの姿と結びつけているし、ドストエフスキイの『カラマーゾフの兄弟』でもキリストは、囚われ人として大審問官の獄舎に現われる。――以下アベリンツェフの記述はもう少し続き、ブルガーコフの『巨匠とマルガリータ』、パステルナークの詩、ブロークの叙事詩『十二』、バルビュス、パゾリーニの映画等の例が挙げられている。

もちろん辞典の要約的記述には多くを期待出来ないのであるが、ドストエフスキイのキリストに関して三行ほどしかないといささかガッカリする。しかし、この文脈は示唆に富む。芥川龍之介のキリストを、先程の世紀末・ルナンの線に位置づけるとすれば、ネクラーソフの所謂「キリストを思い出させるために遣わされた」者たちの一人であるドストエフスキイとは、まったく位相を異にするからである。